日本の国語辞典

沖森卓也

一　国語辞典という名称

国語辞典とは一般に、日本語を見出しとし、日本語で説明するという辞典をさす。中国語を見出しとして日本語で説明した辞典を「中日辞典」、英語を見出しとして英語で説明した辞典を「英英辞典」というのに照らせば、「日日辞典」ということになる。「国語」とは〈国家の言語〉〈国民の言語〉と定義付けるならば、いわゆる「公用語」の概念に近い普通名詞である。これが「日本語」と同義で用いられるようになるのは、一九世紀末の、標準語をめぐる議論を踏まえ、一九〇〇年に小学校令改正によって国語科が設けられたころから広まったようである。

「国語辞典」と銘打つ最初のものは、山田忠雄『近代国語辞書の歩み——その模倣と創意と』上（三省堂、一九八一年）に照らすと、『国語辞典』（林幸行編、修学堂書店、一九〇四年）かと思われる。ただし、この辞典は雅語辞典であり、その後も雅語辞典もしくは読書作文辞典に「国語」という名が多く用いられた。その一方で、「日本国語」というように「日本」を冠する名称も『大日本国語辞典』（実質的には松井簡治編、一九一九年）に見えるようになる。これによって日本語辞典が「国語辞典」と称されることが広まったのである。

現代における「国語辞典」を定義するならば、一般社会もしくは学習上知っておくべき日本語の語彙を、その語形によって五十音順に配列して見出し語として掲出し、その

語義などを説明したものということができよう。そこには、日常的に用いる語のほか、社会生活を営む上で必要な専門的な用語、また教養としての古語・雅語などが含まれ、その語義だけでなく、慣用的な漢字表記、その語の正しい使い方なども知ることができるように編集されている。その規模について言えば、見出し語が二〇～二五万程度のものを「中型辞典」と呼び、それ以上のもの、たとえば公称七五万語という『大辞典』（平凡社）、五〇万語の『日本国語大辞典』（第二版、小学館）を「大型辞典」、一〇万語以下のものを「小型辞典」と呼ぶのが一般的である。

二　国語辞典の歴史

日本における辞書は中国のそれを模倣したものに端を発し、当初は字書・義書・韻書など、漢字もしくは漢語を基準として分類配列するというものであった。これに対して、日本語を分類の基準とする音引き辞典が一二世紀に出現するようになる。これが『色葉字類抄』（橘忠兼、一一四四～八〇年成立、三巻）である。この書は、語（和語だけでなく漢語をも含む）を第一音節でイロハ順に分けて四七部を立て、その中を天象・地儀・植物・動物・人倫から国郡・官職・姓氏・名字までの二一部門に意義分類して、同じ訓みを持つ漢字を配列したものである。日本語の語形によって見出し語を一定の順序に配列したものを「国語辞典」と呼ぶならば、これが日本最初の国語辞典となる。

『色葉字類抄』が出現した背景には、仮名の配列基準となる「いろは歌」の定着がある。一一世紀半ばごろに成立した「いろは歌」が広く流布したことで、日本語を見出しとする音引き辞書が可能になったのである。ただし、それは語の第一音節のみをイロハ順に配列するというものであって、第二音節以降は従来行われていた意義分類をも併用することで、むしろ検索に資するように編集された。このように二つの配列基準を併用する方式はその実用性によって「節用集」に受け継がれ、江戸時代に至るまで国語辞典の主流を占める。

ところで、現代語での配列基準となる五十音順についてであるが、「五十音図」は古く「五音」などと呼ばれ、「いろは歌」より少し遡る一一世紀初めごろには成立していた。しかし、その行・段の順が一定せず、アイウエオ順に段が固定するのは一二世紀初めごろ、アカサタナハマヤラワ順の行にほぼ固定するのは一七世紀以降である。このように、五十音図の固定と普及が遅れたため、イロハ順が主として用いられたのである。なお、第一音節を五十音順に配列した辞書としては『温故知新書』（大伴広公、一四八四年）が最古のもので約一万二千語を掲出し、各部は意義によって分類されている。

明治に入っても「節用集」の流れを引くイロハ引きの辞書は刊行されたが、その中で注目されるのが『和漢雅俗いろは辞典』（一八八九年）である。イロハ順を語末まで徹底させ、約七万三千語の見出し語に「名」（名詞）、「自他」「する」（動詞）、「形」（形容詞）などと品詞名を記し、最初にその漢字表記を、そして漢語・和語の類義語、簡単な語釈などを記す。人名・地名・動植物名・有職故実などの百科的語彙も収録し、挿絵も添えられている。この書は前年に刊行した『漢英対照いろは辞典』から英語の対訳を削除し、縦組みとしたものである。

これより少し前、明治政府が本格的国語辞典を目指して編纂を企画したのが『語彙』である。五十音配列で、雅語のほか、俗語・漢語・外来語なども見出しとしている。動詞・形容詞には活用語尾を示し、語釈も類義語で言い換えるだけでなく文として説明する点に新しさが見える。しかし、一八七一年から一八八一年までにア～エを出版して中断した。ア～エの編集刊行だけでも十年以上を費やすという状況であり、官費の支出にも限界があったためであった。

一八七五年、文部省は『語彙』編集に代えて、大槻文彦一人に辞典編纂を命じた。ウェブスターのオクタボのような辞書を目指して、この事業に取り組み、一八八六年に完成を迎えた。しかし、文部省は出版を見送り、一八八八年には稿本を下賜した。これを自費出版したのが『日本辞書言海』（一八八九～九一年、四冊）である。普通語を中心とした見出し語約三万九千を五十音順に配列する。見出しの平仮名書きに語構成の「―」を付し、その右に片仮名で発音を示す。下には品詞、動詞の自他（および活用語尾）、語釈を示し、時に用例を付す。語釈は、単なる言い換えでなく、詳しい説明が施されている場合も多く、また、独自の語源説も展開されている。漢語をその新旧、雅俗などの別によって分類しており、明治以来の近代化の過程における漢語の諸相にも配慮した形となっている。『言海』刊行後も大槻はその増補を行っていたが、一九二八年に草稿半ばで死去した。この遺志を継いで刊行されたのが『大言海』（一九三二～三五年、四冊）である。なお、『言海』刊行以前にも五十音順配列のものに『日本小辞典』（物集高見、一八七八年）、『ことばのその』（近藤真琴、一八八五年）などがあったが、普通語を見出しとし、精確な語釈を施した『言海』が広く世に受け入れられたことによって、五十音引きの辞典が次第に主流となった。

『日本大辞書』（山田美妙、一八九二～九三年、一二冊）は、『言海』に対抗して編集されたもので、口語体によって語釈を記し、アクセントを表示した最初のものである。漢語についての扱いも『言海』を正す点が少なくないが、語釈の記述はア行においては詳しいものの、カ行以下は編集期間を極めて短縮させたため簡略なものとなっている。

『大日本国語辞典』（冨山房・金港堂、一九一五～一九年、四冊）は共著者に上田万年の名も見えるが、実質的には松井簡治による編集である。松井は当時の日本語辞典が西洋より劣ることを痛感し、一八九七年ごろにその編集を志したという。見出し語は約二〇万四千語で、古代語から現代語にまでおよび、専門語や外来語をも収録している。直接に原典に当たって、それぞれの語を文脈に沿って解釈していることから、語釈の正確さ、用例の確かさは高い評価を得た。松井は初版刊行後も項目の増補改訂に努め、増補として別冊二巻の編集刊行を計画していたという。

このほかに戦前までの主なものを挙げておく。固有名詞をも多く収録した『ことばの泉』（落合直文、大倉書店、一八九八年）は、百科語彙を豊富に収載して『改修言泉』（芳賀矢一、大倉書店、一九二一～二八年）となり、初めて国語辞典に百科項目を取り入れた『辞林』（金沢庄三郎、三省堂、一九〇七年）も、その後改編されて『広辞林』（金沢庄三郎、三省堂、一九二五年）となった。また、『大辞典』（下中弥三郎、平凡社、一九三四～三六年、二六巻）は公称七〇万余語を見出しとする現在最大規模の国語辞書であるが、語釈には荒削りな点が多い。

戦後になると、『広辞苑』（新村出、岩波書店、一九五五年）が『辞苑』（新村出、博文館、一九三五年）を改訂増補して刊行された。特に、その第二版補訂版において百科項目を充実させたことでますます評価を高め、現在第六版（二〇〇八年、見出し語約二四万語）に至っている。語源に近いものから語義を示し、用例は古典中心で、現代語の簡単な作例が添えられる。

『日本国語大辞典』（小学館、一九七二～七六年、二〇巻、縮刷版、一九七九～八一年、一〇巻）は『大日本国語辞典』をもとに、松井簡治の孫、松井栄一が中心となって編集されたもので、見出し語約四五万語。用例を幅広く収集し、その豊富さでは他の追随を許さない。語源説、方言、発音・アクセント、古辞書の出典、補注などを末尾に付す。これを改版して二〇〇〇～〇二年には第二版（一三巻、別巻一冊）が刊行された。見出し語約五〇万語、語の意味用法の変遷などを詳説する語誌欄が新たに設けられた。

『大辞林』（松村明、三省堂、一九八八年）は現代語の一般的な語義から記述するというように現代語を重視したもので、第三版（二〇〇六年）は見出し語数約二三万八千語。現代語優先のものにはこのほか『角川国語中辞典』（時枝誠記・吉田精一、角川書店、一九七三年）、『学研国語大辞典』（金田一春彦・池田弥三郎、学習研究社、一九七八年）などもある。

小型の国語辞典としては『小辞林』（金沢庄三郎、三省堂、一九二八年）の刊行が最も古く、使いやすいことから広く用いられた。これは語釈が文語体であったため、見坊

豪紀は昭和一四年から口語体に改め始めた。それによって、見出し語を現代語中心とした、最初の普通語辞典である『明解国語辞典』（金田一京助、三省堂、一九四三年）が刊行に至った。戦後になって、語釈を類義語に言い換えるのではなく、用例に即して説明するという新しいスタイルをもつ『新しい漢字と国語の辞典』（学習資料社、一九五三年）が世に出された。これを受けて『例解国語辞典』（時枝誠記、中教出版、一九五六年）は長めに詳しく語釈を与える方針を採った。このような語釈や用例の示し方はその後の小型国語辞典に大きな影響を与えた。

現行の主なものを挙げると、『三省堂国語辞典』（見坊豪紀主幹、三省堂、一九六〇年）は、新語をいち早く見出し語として立てて現代の辞典を目指す。『岩波国語辞典』（西尾実ら、岩波書店、一九六三年）は基本義を中心にすえて簡潔に語釈を与えるところに定評がある。『新明解国語辞典』（山田忠雄主幹、三省堂、一九七二年）は独特な語釈、豊富な用例に加え、アクセントを表示していることで知られる。近年に刊行されたものは語釈だけでなく、その語の使い方を具体的に示すことに特徴が見られる。『明鏡国語辞典』（北原保雄、大修館書店、二〇〇二年）は文法的な説明をも詳しく記し、『小学館日本語新辞典』（松井栄一、小学館、二〇〇五年）は類義の表現をも詳しく解説する。これらに共通するのは従来の国語辞典に比して補説的な説明が詳しい点である。

三　国語辞典の現状

国語辞典の現状を考える上で、比較的最近に新たに刊行された次の二つの小型国語辞典を例として、その現代的傾向と問題点を考えてみたい。

『明鏡国語辞典』（北原保雄編、大修館書店、二〇〇二年〈初版第七刷携帯版〈二〇〇九年〉を使用。以下『明鏡』と略称する〉）

『小学館日本語新辞典』（松井栄一編、小学館、二〇〇五年〈初版第一刷を使用。以下『小学館』と略称する〉）

一般に新たに刊行される辞典は、既刊のさまざまな辞典を批判的に参考にし執筆編集されるからである。その意味で、既刊のものを受け継いでいる面もあり、また新たな語釈が試みられていることから、問題点をより浮き彫りにすることができよう。

㈠　見出し語をめぐって

まず国語辞典を引く場合、問題となるのは知りたい語があるか、見出し語として辞典で探せるかという点である。おそらく、使用者側は単純に見出し語として立っているものと思って引くのが一般的であろう。たとえば、「君にし

てからが、そんなふうでは困ったものだ」という「にしてからが」の意味を調べたいと思ったとする。そうすると、まず「にしてからが」という見出し語を引くことになろう。『小学館』にこれを探すと、「にして」の見出しのもとに、子見出しとして「にしては」「にしても」はあるが、「にしてからが」は示されていない。ただ、このような連語が立項されていないのはこの辞典だけに限ったことでもない。それでは、『小学館』にこの連語形が全く触れられていないかというと、そうではない。格助詞「から」の項目を引くと、「①動詞作用の始まりを示す」のなかに次のような説明が見える。

(オ) 物事全体の情況を表すものとして、その一端を示す。「…を始めとして」の意。「…からして」「…にしてからが」などの形で用いられることが多い。(例)
彼は態度からして生意気だ／皆のまとめ役である君にしてからがこの体たらくでは今後が心配だ。

ここでは用例までが示されているのである。しかし、「にしてからが」を「から」でも引いてみるというのは、かなり粘り強い、もしくは辞典を引きなれた人でなせる業であって、見出し語にその語がなければ、それ以上引くことはしないのが普通であろう。この点で言えば、「にしてからが」という見出しを立てて、格助詞「から」の中にある記述を参照させる工夫が必要であろう。

次に『明鏡』を調べる。そこには「にしてからが」が見出し語として見え、次のような語釈が与えられている。

肝心のそれからして、すでに問題を含んでいる意を表す。…でさえもが。…にして。「リーダー―この始末だ」(以下略)

このように、見出し語に見えることは辞書の使用者に安心感を与える。その裏には、編集サイドが見出し語に十分な配慮を施していることもうかがえる。ただ、その語釈に見える、言い換えの「にして」の項目を見ると、上記の用例の説明に最も近いのが次の語釈である。

③(体言に付いて)逆接を表す。…であるのになお。…なのに。「この年―まだ迷いがある」「教師―このざまだ」

ここでは、逆接の意味だと説明しており、「にしてからが」の語釈とは径庭が見られる。それは、どうも右記③の二つの用例が少し用法が異なることに起因しているように思われる。「この年にしてまだ迷いがある」の「にして」はある時・段階に達したという確定した事柄を前提として、後にその前提から導かれる事柄とは落差のある事態が生じる意を表している。これに対して「教師にしてこのざまだ」は「にしてからが」と同じような用法であって、最も基本的中心的なものを例示して、他は言うに及ばないという意を表すものと捉えられる。すなわち、「にして」③

の語釈にやや難があるのである。『小学館』の「にして」は③として「例を提示し、強調する」とあるように、そのような語釈をも与えるべきであろう。このように考えると、見出し語として立っていた『明鏡』の「にしてからが」の語釈にも少し問題があるようで、たとえば次のような用例には説明に窮する。

「悪に対しては、武力による鎮圧」を支持する彼にしてからが、ブッシュ政権の考え方は危険すぎると憂慮しているのだ。（日本経済新聞 二〇〇三年二月九日）

すなわち、「肝心のそれからして、すでに問題を含んでいる意を表す」というのではなく、「にしてからが」は最も基本的中心的なものを例示し、他のものは言うまでもなく以下の叙述に当てはまるというような意を表すと記述するべきであろう。

ただ、一言断っておくが、これは特定の辞典、特定の項目を揚げ足取りの批評をしようとする意図によるものではない。本稿ではすべて、どの辞典にも同じようなことがあるという一つの例として挙げているに過ぎない。国語辞典の場合、隣接する項目であっても執筆者が異なるのが一般的である。それによって生じる語釈の「ずれ」などが最終的にどこまで調整できるかは辞書編集にとって大きな課題である。個々の項目ではその語釈がよい出来栄えであったとしても、総体として見渡すことの重要性を、自戒を込めて述べるものである。

話を戻すと、『明鏡』の「肝心のそれからして」だけが「にしてからが」の意味に相当するものであって、「問題を含んでいる」という説明はそのような文脈で用いるという使われ方に関するものということになろう。ここでは、意味と使われ方を区別しておく方がわかりやすい。

見出し語の立て方を問題にしつつも、語義解説の適切さについて述べることとなったが、見出し語に関して言えば、特に連語形をどのように立項すべきか、さらに工夫の余地があると言える。この点で、『明鏡』の試みを紹介しておくことにする。たとえば、助詞の「か」の項目を見ると、語釈のブランチに次のような連語形を数多く示している（連語形のみを示し、他は省略する）。

㈠〔副助〕②（「…のみか」「…ばかりか」「…どころか」の形で）③（「どんなにか」の形で）④（「AかBか」の形で）⑤（疑問を表す語に付いて）

㈡〔終助〕⑤㈠（「…とする［しよう］か」「…てみるか」などの形で）

さらに、「文型表現の中でさまざまな意に発展する」などと記して「『か』の文型表現」に次のような連語を示す。

1「AかBか」㈠（多く「…かどうか」の形で）㈡（上に数値を伴って、「…か…ない（か）」の形で）㈢（「…か何［誰・どこ］か」の形で）㈣（多く「…か

そこ(い)ら」の形で、数値を受けて)

2 疑いを表す終助詞「か」(ア)(「…たものか」の形で)(ウ)(「…ではじゃ」ないか」などの形で)(エ)(「…ないものか」の形で)

3 質問を表す終助詞「か」(ア)(「…(よ)うか」の形で)(イ)(「…ないか」の形で)(ウ)(「…するか」「…(よ)うか」「…ないか」などの形で)(エ)(「…ないか」「…ん[ぬ]か」の形で)(オ)(「いいか」「よろしいか」の形で)(カ)(「…ではじゃ」ないか」「…ではありませんか」などの形で)(キ)(「…てはどう[いかが]か」「…たらどう[いかが]か」の形で)(ク)(「…てもらえる[いただける]か」「…てくれる[くださる]か」の形で)

このような詳細な説明は従来の国語辞典には見られないものであって、単に「か」の意味を添えて連語を理解せよという立場ではなく、その連語自体が有する独特の語義・ニュアンスを細かく記述しようとしている点で有益である。今後の語釈の与え方に一つの方向を示すものであろう。

(二) 語釈をめぐって(1)

次に語釈について、さらに検討してみよう。比較的最近の国語辞典では語釈の与え方が相当に綿密になっていて、個々の語における語釈に若干の適否はあるものの、現代語の実態にかなり沿った形で記述されていると言える。ただ、その中でやや手薄だと思われるのが副用言に関してであり、特に副詞・接続詞において再検討する余地がかなりあるように見受けられる。それは品詞別の執筆内容の充実度において、動詞・形容詞・名詞(代名詞)および助詞・助動詞に比べると、語義の記述が従来やや粗雑であったきらいがあるからである。

まず、接続詞について言えば、たとえば「そこで」を例にして先ほどの二つの辞典の語釈を示してみよう。

『明鏡』①前の話をひとまずおいて、新たに話を展開する語。「仕事も軌道に乗った。—ひとつ相談に乗ってもらいたいことがある」②そういうわけで。そのために。「疲れがたまってきた。—少し休むことにした」

『小学館』①前の話題をうけて、そこから出てくる次の話題へ移るときに使う語。というわけで。それで。例:ケーキの作り方を教わった。そこでさっそく作ってみた/仕事がつらい。そこで一計を案じた。②なんとなく次の話題へ移るときに使う語。さて。ところで。例:そこで、あの話はどうなった?/そこで、君に借りた本だけど…。

『明鏡』の①が『小学館』の②に、『明鏡』の②が『小学館』の①にだいたい相当するようである。ただ、『明鏡』

の①と②の語釈はややバランスが悪く、②についても言い換え語だけを示すのではなく、「…ときに使う語」などというような、接続関係を概括的に記述するものが必要であろう。そこで、言い換え語の「それで」を見ると（「そういうわけで」は見出し語にない）、「前に述べたことを受けて、それを理由とする帰結を述べるときに使う。そのために。それだから」とある。ここでも「そのために」と言い換えられていることから、「そこで」は「それで」とほぼ同義と捉えられていて、前の文を原因・理由として、後の文にその結果・帰結を述べるという関係を表すものと記述できそうである。この点で『小学館』①の語釈「前の話題をうけて、そこから出てくる次の話題へ移る」という語釈はややわかりにくい。「そこから出てくる」とは「そこから結果として導かれる」という意味であろうか。いずれにせよ、「そこで」は理由もしくは前提を表す語として捉えてよいように思われる。語釈を示す以上は、その接続関係をわかりやすく示しておくべきであろう。

そして、もう一点、上記の「そこで」の用例を見ると、いずれも後の文には話し手自身の意志による行為が述べられている。ほかにも、そのような用例を多く見出せる。

最近インフルエンザが流行しています。そこで、今日はその予防法についてお話しましょう。

一週間休暇が取れた。そこで、夫婦で海外旅行に出かけた。

このような共起する表現に関する情報も是非とも付け加える必要があろう。

ちなみに、共起の情報に関して言えば、主要な動詞や形容詞における格（ヲ格・ニ格など）、ならびにそこに立つ語群の性質を『小学館』では示している。前者については、すでに『新明解国語辞典』などにも見られるが、後者については『小学館』の凡例に次のように記されている。

名詞は、モノ・コト・ヒト・トコロなどの種類に分け、それぞれ、モノは形のあるものを、コトは形のない事柄を、ヒトは人間および人間に準じるものを、トコロは場所をあらわす。

これまでも国語辞典には「打消しの語を伴って」とか「多く推量をあらわす表現を伴って」とかいうような情報は示されてきたが、今後は共起する情報についてさらに詳しく細かく記述されるようになるであろう。

㈢　品詞認定をめぐって

次に副詞を扱うことにするが、副詞は品詞的にゆれが大きく、名詞や形容動詞との区別が紛らわしい点が多い。そこで、その品詞の認定を中心に少し見ることにする。

「ぎりぎり」の項目は次の通りである（論旨と関係のない記述は省くことにする）。

『明鏡』〔副〕①〔ニ〕限度いっぱいで、それ以上ゆとりがないさま。「今行けば―終電に間に合う」「締め切り―に願書を出す」「―の線まで譲歩する」②力を強く加えるさま。「縄で―縛り上げる」

『小学館』【限限】〔名・形動〕限度いっぱいであること。それ以上、それ以外にもう余地がないさま。例：ぎりぎり何時までに行けばいいのですか／これが譲歩できるぎりぎりの線だ／発車ぎりぎりに飛び乗る。

『小学館』は『明鏡』②の意味に相当するものを別に立項している。

『小学館』〔副―ト〕①物がきしったり歯をくいしばったりするときなどの音を表す。例：ぎりぎりと歯ぎしりする。②強く巻きつけたりするさま。例：体中を縄でぎりぎり縛られる／包帯をぎりぎりときつく巻く。

このオノマトペに関する記述で言えば、『小学館』が①の擬音語の用法を記述し、しかも「ぎりぎり」という語形だけでなく、「ぎりぎりと」という語形でも用いられることが示されている点で親切である。

さて、『明鏡』①と『小学館』【限限】についてであるが、まず『小学館』が〔名・形動〕とするのは、この辞典が大いに参照したと考えられる『日本国語大辞典』（第二版）にも〔名〕（形動）」とあるからであろう（編者の松井栄一は『日本国語大辞典』の編集委員でもある）。そこでは用例として次のようなものが見える（以下、省いたところがある）。

ぎりぎりの所でときはいろをかへ（柳多留）

三拾五匁、とんと、ぎりぎりじゃわいな（東海道中膝栗毛）

横浜にはギリギリに帰れるかどうか（海に生くる人々〈葉山嘉樹〉）

追ひ詰められるなら、ぎりぎりまで追ひ詰められて見ることが、今の自分には必要な気もした（そばやまで〈永井龍男〉）

やっとぎりぎり八時に門に飛び込みます（道〈庄野潤三〉）

第一例を見ると、もとは名詞であることがわかり、また、助詞「まで」に付く第四例があることからも名詞と認めることができる。そして、第二例「ぎりぎりじゃ」（現代語形「ぎりぎりだ」）と、第三例「ぎりぎりに」という用例から形容動詞「ぎりぎりだ」を認定したと見られるが、現代語でも「電車の発車時刻にぎりぎりだったが、何とか間に合った」とも言えるように形容動詞をも認めることができよう。この限りにおいて、『小学館』の品詞認定に異論はない。ただ、第五例「ぎりぎり」を見ると、副詞をも認定せざるを得ない。すなわち、「ぎりぎり」の品詞の認定について見ると、〔名・形動・副〕とするのが穏当である。

ただ、形容動詞「ぎりぎり」の連体形は「生育にぎりぎりな過酷な環境」と言えないわけではないが、普通には連体修飾する場合「ぎりぎりの」となる（前記用例「ぎりぎりの線」参照）。この「ぎりぎり」については『小学館』では名詞、『明鏡』では副詞として扱っているように見受けられる。このような品詞認定の相違について辞典の使用者はどのように受け止めるのであろうか。国語辞典はいい加減だと槍玉に挙げるかもしれない。しかし、これは一つには国語辞典が依拠するところの学校文法の未成熟さ、もう一つは国語辞典の、使い手に対する説明の拙さ、もしくは使い手の怠慢に起因している。

実は『明鏡』では付録として「品詞解説」を載せている。その副詞の説明に次のような一節がある。

副詞によっては「〜の」を伴って連体修飾したり、「〜だ」を伴って述語となるものがある。「さすがの僕も」「もうあっぷあっぷだ」が、本書では、これも副詞の一用法と考え、これによって別に名詞や形容動詞を立てない。

学校文法では助詞「の」は名詞に付くとされる。しかし、『小学館』も「せっかく」「なかなか」を副詞だけと認定しながら、「せっかくの御招待」「なかなかの人物」の例を示しているのが現状である。つまり、国語辞典の品詞認定として、ある種の副詞は「の」を伴って連体修飾し、状態的な意味を表すことがあることを踏まえており、そのことを学校文法においても説明しておくことが望ましい。また、品詞認定にこだわるのであれば、学校文法は必ずしも十分なものではないという意識を持ち、それぞれの国語辞典におけるその扱いに周到な理解を持つべきである。『明鏡』ほど詳しい解説があるのは珍しいが、凡例などをも注意深く読むことは必須のことであり、よくも読まずに辞典の欠陥を論うことは無知蒙昧と言わなければならない。つまりは、国語辞典それぞれに個性があるという前提に立つことが求められているのである。

ちなみに、筆者は「発車時刻にぎりぎりだったが」のように二格を取ることがあることから、「ぎりぎり」に形容動詞を認める立場に立つ。また、「彼女は八時ぎりぎりに会場に到着した」の「ぎりぎり」は基本的には副詞と見てよいと考える。これは端数のないさまを表す副詞「ちょうど」「ぴったり」などが副助詞的にも用いられることに準じて扱われよう。

ちょうど七時になりました

⇔ 七時ちょうどになりました

見積もり通りぴったり一万円だった

⇔ 見積もり通り一万円ぴったりだった

ぎりぎり八時に到着した

⇔ 八時ぎりぎりに到着した

㈣　語釈をめぐって(2)

さて、副詞の語釈について見ることにしよう。まず、「けっこう」について両者を比較すると、『小学館』には『明鏡』にない、次の語釈を示している。

［二］〔形動〕④甚だしくはないが、かなりの程度であるさま。やや俗語的。例：総支出を計算すると、結構な額になる。

また、同じく『明鏡』には見えない情報（次の波線部分）も示されている。

［二］〔形動〕②満足がいく状態であるさま。望ましく、欠けたところのないさま。文脈、言い方によって皮肉な意味にもなる。例：見たところ丈夫そうで結構だ／お支払いは後でも結構です／私はこの席で結構／遊んで暮らせるなんて結構なご身分です。

③それだけで十分であるさま。あるものを必要としないさま。遠回しに断る場合や遠慮して辞退する場合などに言う。例：酒はもう結構です／お見送りなど、本当に結構ですから。

これらは実際の用法において、どのような場面で用いるか、どのような気持ちをこめて言い表し、また相手にどのような受け取られ方をするのか、どのような語感・ニュアンスを伴うかということなどを示したもので、概念的意味を中核としつつ、その周辺にある意味などをも語の意味として記述することは必要である。これも従来の辞典に見られなかったものではないが、今後も国語辞典において充実させていく必要のある課題である。

なお、『小学館』にはブランチの語釈の先頭に、笑った顔、厳しい顔のデザイン化された記号を用いて、「誰がどこで使用しても、その語を用いるときにプラスマイナスの評価（対象を賞賛したり、非難したりする感情）を伴うと思われる語義」に関して、「その語にこもる表現者の感情のプラスマイナス」が示されている。その凡例には「こまかい」の項目が示され、次のような語釈にその記号が用いられている。

［プラス評価］心づかいなどがよく行き届いている、小さいことにまで心が及んでいる。例：きめの細かい指導をする／細かく神経を使う／細かい心づかいに感謝する／芸が細かい。

［マイナス評価］取るに足りない。些細なことである。小さなことを問題にしすぎる場合などにいう。例：細かいことに気をかけすぎる／彼女の細かい口出しはわずらわしい。

「プラス評価」「マイナス評価」という分析は『現代形容詞用法辞典』（飛田良文・浅田秀子、東京堂出版、一九九一年）などの解説にすでに試みられてはいたが、発話者自身

の感情的ニュアンスに着目した点に斬新さがある。このようなニュアンスの記述もあるべきかもしれないが、ただ、「細かい心づかいに感謝する」とは言っても、発話者自身がそれをプラスとだけ評価しているかどうかはなかなか判定がむずかしいようにも思われる。

次に「たかだか」を例にする。『明鏡』では三つのブランチを立てて語釈しているが、『小学館』では同じく三つのブランチを立てるものの、標準アクセントで高く発音される部分をゴチック体で示した「タ**カダカ**」と「タ**カ**ダカ・タ**カダカ**」の違いを明示している。ただし、この「たかだか」の例に限って言えば、それはアクセントの違いだけでなく、「たかだかと」と「たかだか」という語形の違いでもあるから、『明鏡』の立場に立てば、「と」が付くか付かないかを示せば、それでも区別ができたはずである。ちなみに、『小学館』は原則としてアクセントを付すことから、必然的にアクセントの違いが明示されることになるが、かりに『明鏡』のようにアクセントを付さない辞典であっても、同じ語で、アクセントによる意味の違いがある場合には、その違いを注記する方がわかりやすい。

とは言え、国語辞典にとってすべての語にアクセントを示す必要は必ずしもないように思われる。それはアクセントが音韻的に機能するのは同音異義語がある場合に限ってであって、その場合には注記が必要であろう。そうでない場合はよく言われているように単なる装飾的なものと言っても過言ではない。また、同音異義語であっても「あつい」は標準アクセントで【厚い・篤い】の場合は「アツイ」であるのに対して、【暑い・熱い】は「アツイ」であるという区別が共通語であっても実際にどれだけ機能しているかと言えば、その将来はかなり暗いのが現状である。ただ、外国人の日本語学習のためにはアクセント表示があるほうが使いやすいことは確かである。

話を戻すと、『小学館』の「たかだか」の項目では、さらに「せいぜい」との違いを例解方式で説明している。その凡例によると、このような類語の使い分け、意味の違いについての欄は約千五百、取り上げた語は約四千六百語であるという。これまでも例解方式をとる国語辞典は少なくないが、その解説の詳しさでも群を抜いている。語義解説を補う記述として、特に日本語表現（作文・発表など）の側面からも有益であろう。

最近刊行された二つの国語辞典を例にして、国語辞典の現状とその傾向を探ってみた。そこには今後進むべき方向性がよく示されており、それは小型辞典だけでなく中型・大型辞典にも望まれるところでもある。ただ、小型辞典が学習辞典的な役割をも担っているのに対して、百科項目をも多く含む中型以上の辞典は社会的な要請において若干の差があることも事実である。限られた紙面であるので、今

回は小型辞典に絞ってその現状をいくつか紹介したにとどまったことをお許しいただきたい。

四　これからの国語辞典

冊子体としての国語辞典はすでに商業ベースでは後退している。しかし、それは国語辞典の需要が落ちているというのではない。冊子体に代わって電子辞書、ＷＥＢ辞書が大きく進出してきたのである。電子辞書は大学生から一般社会人に至るまで広く利用されており、特に大学生では外国語辞書、また留学生を含め日本語学習者の間でも日本語辞典が収められている点で必携のツールとなっている。それによって他の辞典・事典などとともに国語辞典を引くことができる点で、利便性が高く、したがって、冊子体に対してあまり関心が向かないのも致し方ない。ただ、電子辞書を用いることによって、どのような情報を得られたのか、それによって十分に理解できたのかという点はどれほどの満足度に達しているかは明白ではない。この点について言えば、電子辞書が冊子体の電子版であることを考慮すると、電子辞書に搭載されている冊子体自体に対する満足度を問うていることに等しい。それでは、その満足度はどうか。この点に関しては個人差があろうが、多くの人々はその価格（搭載された冊子体辞書の総額との比較）に照らしてだいたい満足しているかのように見える。しかし、それによって冊子体国語辞典に対する関心を逆に低下させていることが辞書業界にとって不幸なこととなっている。

一般人にとっては、電子辞書に「国語辞典」があるということ自体で十分なのであろう。それは一口に「国語辞典」といっても、それぞれに個性があり違いがあるということをほとんど理解していないからである。たとえば、『広辞苑』の国語項目は語源主義であり、古語から語釈を始める。すなわち、最初には古語の用例が示され、現代語は最後に置かれている。これも一つの見識ではあるが、そのような特徴があることに留意しておく必要がある。したがって、辞典の使用者も、まずどのような情報を必要としているかという点から、辞典を使い分ける、賢い消費者にならなければならない。

いずれにせよ、字形や言葉の意味を知るために国語辞典が用いられるという点では、依然として社会における必要度は今後も変わるまい。また、本稿では触れることができなかったが、内向きの「国語辞典」ではなく、外からの視点に立つ「日本語辞典」という将来性にも留意する必要もある。どのような人が、どのような時に、どのような目的で使うか、それによって性格の異なる辞典がそれぞれに充実していくことを切に願う次第である。